



新しい『領解文』の問題点を学ぶ — 安心

20230923 旭照寺彼岸会 山上正尊

報恩講に関する御文章

信心獲得せしむべきものなり

5帖目 11通 御正忌章
 2-1 『註釈版』1107頁)
 4-6 『註釈版』1171頁)
 4-15 『註釈版』1188頁)
 信心獲得 すなわち 聞其名号

たのむ機 「南无といふは歸命」

もろもろの雑行をすてゝ、うたがひなく一心一向に阿彌陀佛をたのみたてまつることなり。

たすくる法 「またこれ發願廻向の義なり。阿彌陀佛といふはすなはちその行」

一心に彌陀を歸命する衆生を、やうもなくたすけたまへるいはれ

『御文章』の六字釈は、機法門を据わりとして願行門の義を撰めるという釈意であります。(騰瑞夢先生会読録)

もろもろの雑行

改悔批判 (梯和上)

雑行雑修とは、ここでは自分の修行能力をたのみにして、本願他力をたのみどころが欠けているものを総称されたことばであります。

宗祖の法門		行	信
外教		現世祈禱	自力
聖道門	穢土 此土入聖	諸行	
要門	浄土 彼土得証		
真門		称名	
弘願			他力

雑行

「化身土文類」観経隠頭 (『註釈版』386頁) 就行立信

正行 往生経の行 読誦・觀察・礼・称・讚嘆供養

雑行 正助二行を除きて以外の自余の諸善は、ことごとく雑行と名づく

『高僧和讃』善導讚68首

「浄土の行にあらぬをば ひとへに雑行となづけたり」

邪雑 邪曲

雑多 行の種類や目的が雑多

雑修

『高僧和讃』善導讚66首

助正ならべて修するをば すなはち雑修となづけたり

『高僧和讃』善導讚67首

仏号むねと修すれども 現世をいのる行者をば これも雑修となづけぞ

『一念多念証文』（『註釈版』688頁）

異学といふは、聖道・外道におもむきて、余行を修し、余仏を念ず、吉日良辰をえらび、占相祭祀をこのむものなり、これは外道なり、これらはひとへに自力をたのむものなり。別解は、念仏をしながら他力をたのまぬなり。別といふは、ひとつなることを、ふたつにわかちなすことばなり、解はさるといふ、とくといふことばなり、念仏をしながら自力にさとりなすなり。かるがゆゑに別解といふなり。また助業をこのむもの、これすなはち自力をばげむひとなり。自力といふは、わが身をたのみ、わがころをたのむ、わが力をばげみ、わがさまさまの善根をたのむひとなり。

『教章』 生活

親鸞聖人の教えにみちびかれて、阿弥陀如来のみ心を聞き、念仏を称えつつ、つねにわが身をふりかえり、慚愧と歡喜のうちに、現世祈禱などにたよることなく、御恩報謝の生活を送る。

すし

「行文類」引文『選択集』（『註釈版』186頁）

速欲離生死、二種勝法中、且闍聖道門選入淨土門。欲入淨土門、正雜二行中、且拋諸雜行。選應歸正行。欲修於正行、正助二業中、猶傍於助業選應專正定。正定之業者即是稱佛名。稱名必得生。依佛本願故。

「信文類」大信釈 引文散善義 深心釈（『註釈版』218頁）

また深信するもの、仰ぎ願はくは一切の行者等、一心にただ仏語を信じて身命を顧みず、決定して行によりて、仏の捨てしめたまふをばすなはち捨て、仏の行ぜしめたまふをばすなはち行ず。仏の去らしめたまふところをばすなはち去つ。これを仏教に随順し、仏意に随順すと名づく。これを仏願に随順すと名づく。これを真の仏弟子と名づく。

Q 何を捨てたのか？

A 観仏など非本願の行による成仏道。

Q 仏が観仏による成仏道を捨てさせたという根拠は？

A 『観経』流通分に釋尊自らの言葉として観仏を捨てしめ、称名念仏を行ぜしめている。

此經名觀極樂國土・無量壽佛・觀世音菩薩・大勢至菩薩、亦名淨除業障生諸佛前。…… 上來定散兩門の益を説くといへども、

佛告阿難、汝、好持是語。持是語者、即是持無量壽佛名。佛說此語時、尊者目犍連・阿難及韋提希等聞佛所說、皆大歡喜。 仏の本願に望むるに、意、衆生をして一向にもつばら弥陀仏の名を称せしむるにあり。

Q 観仏による成仏道とはどのようなものか？

A 唯識法身の観、自性清淨仏性観（『聖典全書』一卷745頁）（『註釈版』七祖篇432頁）

淨影寺慧遠『觀經義疏』 (二七七卷180頁)	聖典セミナー『觀經』 梯實圓和上182頁
---------------------------	-------------------------

是心作仏 始学名作 己の当果に望んで 彼に生ずるを觀ずる 由つて心作仏と名く。	どんなに濁ついても水の本体は清淨なわけですから、淨化さえすれば本来の症状を回復するように、懺悔し、滅罪して、観仏の修行をおこなえば、心の濁りが淨化され、心は本来の清淨な法身にかえる
--	--

是心是仏 終成即是	法身とは、仏の無分別智によって悟られている
-----------	-----------------------

諸仏法身と己とは同体を現ず。
仏を觀する時、心中に現ずるは
即是諸仏法身の体

不生不滅の法（真如・法性）のことで、
衆生の煩惱の心も、その本性は清浄な法身真如
そのものである

聖典セミナー『觀經』梯實圓和上182頁

いづれにしても、法界身とは諸仏の本性であると同時に、一切の衆生の心の本性でもある
「真如・法性」そのものことで、それを仏のがわでいえば、法身といい、衆生のうえで
いえば、心の本性である本来清浄な仏性（如来藏）のことである、と解釈されたわけです。

192

「ふたごころがない」ということで、疑い心をまじえない心相

阿彌陀如來御たすけさぶらへとのみまつてさぶらふ

たのむ（頼む）『大辞林』

- ① 相手に：してくれ、または：しないでくれと願ってそれを相手に伝える。依頼する。
 - ② どう活動・処理すべきなのか知っている人に処理などを依頼する。
 - ③ 依存しうるだけの能力がそれにあると信じる。あてにする。
- 憑む『漢字源』

① よる。よりかかる。たよりにする。

② よる。たのむ。相手をあてにする。その力をたのみにする。

「信文類」(『註釈版』285頁)

ここをもつて、いま大聖（釈尊）の真説によるに、難化の三機、難治の三病は、大悲の弘誓を憑み、利他の信海に帰すれば、これを矜哀して治す、これを憐憫して療したまふ。たとへば醍醐の妙薬の、一切の病を療するがごとし。

「行文類」六字釈(『註釈版』170頁)

「帰説(キエツ)」ヨリタノムナリ、「帰説(キサイ)」ヨリカカルナリ

『唯信鈔文意』(『註釈版』699頁)

本願他力をたのみて、自力をはなれたる、これを唯信といふ

信憑（たのむ）

自力を捨て他力に帰する本願の信心を表すことば

たすけたまへとたのむ

鎮西派 願求 「たすけてください阿彌陀さま」

蓮如上人 許諾 「かならずたすける」と仰せられる決定摂取の勅命を受諾して

「さようならば、おたすけくださいませ」「左様になし給へ」

自力の行も自力の信もすてる …… 私がさとする仏道をすてる 仏がすくう仏道に乗る

どんな人が報恩講に集まっていたか

(5-1) 不信心のともがら (4-6) くせ法門を沙汰して法義をみだす

(3-1) 近代このごろの人の佛法しりがほの體たらくをみをよぶに、外相には佛法を信するよしをひとにみえて、内心にはさらにもて當流安心の一途を決定せしめたる分なくして、あまさへ相傳もせざる聖教をわが身の字ぢからをもてこれをよみて、しらぬ多せ法門をいひて、自他の門徒中を經廻して虚言をかまへ、結句本寺よりの成敗と號して人をたぶろかし物とりて當流の一義をけがす條、眞實眞實あさましき次第にあらずや。

ほか省略

新しい「領解文」(浄土真宗のみ教え)

南無阿弥陀仏

「われにまかせよ そのまま救う」の 弥陀のよび声
私の煩惱と仏のさとりは 本来一つゆえ
「そのまま救う」が 弥陀のよび声

ありがとう といただいて

この愚身をまかす このまままで

救い取られる 自然の浄土

仏恩報謝の お念仏

これもひとえに

宗祖親鸞聖人と

法灯を伝承された 歴代宗主の

尊いお導きに よるものです

み教えを依りどころに生きる者 となり

少しずつ 執われの心を 離れます

生かされていることに 感謝して

むさぼり いかりに 流されず

穏やかな顔と 優しい言葉

喜びも 悲しみも 分かち合い

日々 精一杯 つとめます

1. 石上智康著『生きて死ぬ力』（増補版2020年中央公論社）

- 愚身（み）
- 悟りにいたる うえで 大切なことは 無常を観じる ということ（65頁）
- こと ものすべて 縁起 空である と悟り安楽に 成る（90頁）



精いっぱい生きて
死ぬときは「そのままでもいい」

石上智康 宗廟寺 宗廟寺 宗廟寺 宗廟寺
現役の84歳
コロナ禍の今こそ伝えたいこと

死ななな

（72頁）執われが 悲しみや 喜びなどが まぎれ込む 余地はない 得るものがない 失うものもない
天も地も水も 人も 生きとし生けるもの みな等しく 縁起している 変化している 無常 縁起 空 このことわりの中に 在る

（53）在るがままにすべてが障りなく一つになっていて自他の対立もない
（60）在るがままのそのままが本来の裸のまま頭わになつて

（83）いつさいの静止的な認識執われから解き放たれて自由になれる時日常の身も心も脱落し私という構えもすっぱり抜け落ちて

在るがままにすべてが一つになっていて寸分の対立もなく活き活きと光り輝き満ち満ちている
自分と他者という対立 優劣 美醜 有るとか無いという世俗の分別苦から解き放たれて

（88）余計な分別や執われを加えない いつさい入る余地はない
（91）すべての存在すべての現象が縁起空と悟られていくところに執われの心が悲しみや喜びなどがまぎれ込む余地はない

（91）ただ偉大なる真実があるだけ それはここ それはいま
（93）昔からの言葉でいえば「生死即涅槃」生き死にしているこの無常の世界がすなわちそのまま

仏さまの悟りの境地

2. 総長退任挨拶（『宗報』2023.6）

「そのまま」助ける 二法義の肝要

阿弥陀仏のお慈悲が、なぜ撰取不捨であり得るのか。
煩惱具足のこの私が、信心ひとつで、どうして「そのまま」救われるのか。

↓私の煩惱と仏のさとりは 本来ひとつゆえ
真如法性・縁起・空・無相・自然（お覚りの境地・「そのまま」助ける弥陀の本願）
正しくわかりやすく届く救いの言葉（伝わる伝道）

3. 勸学寮『J』消息 解説（『本願寺新報』2023.2.1）

私の煩惱と仏のさとりは 本来「ひとつゆえ」「そのまま救う」が 弥陀のよび声

ここで問題は、「私の煩惱と仏のさとりは 本来一つゆえ」の受け止め方です。私たち凡夫の立場からすれば、異様な内容と映ります。しかし、阿弥陀如来の立場からするならば違つて受け止めることができるのです。仏教では、迷いの世界とさとりの世界の両方を説きます。いま、私の煩惱と仏のさとりは本来一つ、と言われるのは、さとりの世界の風光を示すものです。

阿弥陀如来には絶対的な真実無相の立場と、人間を救う仏として具体的な私たちをあらわす二面

性があります。それが智慧と慈悲の阿弥陀仏と言われる所以です。智慧とはさとりを指しますので、その智慧の眼で眺めた時には「煩惱と菩提は一つ」と見ることが出来ます。このさとりの智慧から衆生救済の慈悲が導き出されるのですから「ゆえ」が付加されているのでしょうか。
要するに阿弥陀如来のさとりの智慧から「この私をよんでくださる慈悲」が出されたという意味です。

- ↓ 当流は 私が「絶対的な真実無相」（智慧）をさとする仏道ではありません
- ↓ 当流は 仏が「智慧からこの私をよんでくださる慈悲」の仏道です
- ↓ 改悔批判の後半

「これこそが現代版領解文と呼べる解説です。ご門主のお言葉としてしっかりと聞いていただきたいと思います。」（本願寺新報2022.12.20）

本来のご法義の肝要 信二聞其名号 仏願の生起本末を聞く

- 仏願の生起 弥陀が本願を起こされた理由
- ↓ 自らの力では決して迷界より出ることのできない私を救うため
- 本 法蔵因位の際の発願修行
- 末 願行が満足して、阿弥陀仏として 十方衆生を済度されつつあること

4. 「門主『新しい「領解文」を通して伝えたいこと』」【中外日報】2023.3.17）

●ご法義自体は不変ですが、その伝え方は時代や社会の状況に応じた工夫が求められます。
●私は最後の第3段落を重視しています。それは、既に「念仏者の生き方」や「私たちのちかい」でお示しした思いと同様です。



以上 何かご指摘がありましたらご連絡ください。

〒599-8125 大阪府堺市東区西野521番地 旭照寺 senjakuhongan@gmail.com 山上正尊